



小鹽 力著「高倉徳太郎傳」

著者	笠原 芳光
雑誌名	基督教研究
巻	28
号	1
ページ	86-87
発行年	1954-08-30
権利	基督教研究会
URL	http://doi.org/10.14988/pa.2017.0000003737

とは残念至極である。

譯について一々原文を参照していかないから何んとも云へないが、従来よく用いられて来た Ante-Nicene Fathers の譯がいささかきこもなく讀みにくいのに對してこの方は流暢でわかりやすい。本来この叢書は英語で基督教古典をよまうとする多くの人々への要望にこたえて譯も英語として完全なものにし、各書の順序や内容に創意を加へたものであるからそのつもりで讀むものには至極便利である。しかしそれだけに原文の持つニュアンスが失われてはいまいかというおそれが残される(因みに譯文の中では原語は少しも用ゐられていない)。その限りに於て本格的に古典をよまうとするものにとつてこれは怠慢の種になるかも知れない。吾々はやはりこの譯が用いたと云ふ Funk, Patres apostolici, 2 vols, von K. Bihlmeyer und F. Diekamp 1923, Blunt, The Apologies of Justin Martyr (Cambridge Pat. Texts) W. W. Harvey のものにとりくんでゆかねばならないであらう。

猶この書には参考文献、三つの索引があつて研究する者の便宜が圖つてある。しかしそれも敢えていへば Ante Nicene Fathers Vol. 9 のそれにくらべれば規模は小さく、且バルナバス書簡ヘルマスの牧者、ユスチノスの他の著作がこの書にのせられていないことから初代教會研究上の索引としては不十分である。

猶 Journal of Biblical Literature, 1954, March, R. M. Grant がこの書の新聞紹介をしてゐる。

小鹽 力著

高倉徳太郎傳

昭和二十九年六月發行 新教出版社
B 6 版 三三〇頁 定價三五〇圓

「先生にaimまつりしは大なることであつた」と魂の底から告白する小鹽力が、これは、はげしい衝迫にせまられつつ、一字一句刻むがごとくに書きあげた力作である。

高倉徳太郎は大正から昭和初頭にかけて、混沌たるこの國の精神的風土に福音的基督教の礎をかたく据えた人、牧師として神學校長として單獨者の魂をひつつかんで神の前に立たしめたる人、主の證人として眞摯剛毅の文字をあてるに最もふさわしき人である。「生地」より「死への疾走」にいたる弟子小鹽の勁く美しい筆致は、讀む者をしてちよくせつ巨人高倉に、そして彼をとおして主イエスに邂逅せしめるに足るのであらう。

かつて、ケルケゴールは福音書の記事は、イエスが十字架に近づくや急傾斜をなしてかたむいていると言つた。この書もまた「遊學」あたりの平板化した表現は惜しまれもするが、高倉の腦が錯迷を呈する頃から死に向つて傾きつくしていくくんだり、文字の峻しく、また躍動しているのを見る。その果には、こんな言葉もあつた。「三日朝、専子と光子は、『涙も疾走する』おもいをも

つて遺骸をつつみ、葬の備えをした。……櫃におさめられた死骸はおどろくばかり堂々としていた。『先生、のびのびとおやすみになつてゐる』。こういつて、弟子たちは悲しみのうちにも、やすらかさをおぼえた。そして、かつて師がいくたびとなく胸中にくりかえした。アウグスティヌスのことばを、各自の心に反響せしめていた。『なんじのうちに憩うまでは、わがこころは安きを得ず』と。」

私はこの書を読んで古典的なるものへの認識を新たにすることができた。たとえば、ここには師と弟子という人格的結合の跡が、まざまざと記されている。師弟とはギリシヤ哲學以來、極めて古典的な人間關係である。しかも、封建的主従關係にあらず、眞に人格と人格、いな、神のみ前に碎けたる魂と魂とをもつて火花をちらしえた者達が、この高倉とあまたの弟子達をおいて、いずこに存在したであろうか。

高倉の代表作「福音的基督教」は乏しいわが國の神學書の中で、すでに古典的名著に價するといわれている。高倉没後二十年、彼の業に古典の名を冠するのは早きに失するの感もなくはないが、およそ Classicus なる語が、古きものにあらず、よきものを意味する限り、彼に冠されたこの語の位置は不動である。しかし、高倉の神學が自由主義神學を厳しく批判してバルトに迫りつつ、なおその域に達しなかつたこと、また社會的キリスト教に對するはげしいアンチテーゼではあつたが、教會を社會から隔離してその内に閉じこもりつつ福音を説く傾向の因となつたこと、と

もに彼の限界であり、それはそのままに、今日の我々の課題である。

ともあれ、「高倉徳太郎傳」一卷をこの國の教會が生んだ傳記文學の一つの頂點と見ることは、果して私のみの溢美の言であらうか。この世、この時の只中で、しだいに平均化されていく人間像にあらがうことを決意した傳道者は、巨きなる師表がここに告知されていることを看過してはならないであらう。(笠原芳光)

筆者紹介

本宮 彌兵衛	同志社大學神學部講師
土肥 昭夫	同 專任講師
飯 清	米國大平洋神學院留學中 昭和二十四年當神學部卒業
魚木 忠一	同志社大學神學部長
飯小田 實	同 元教授
グイリム・G・ロイド	同 教授
遠藤 彰	同 助教
高橋 虔	同 講師
笠原 芳光	神戸教會傳道師 昭和二十九年卒業